

2014 Annual Report

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター
平成26年度 活動レポート

2014 Annual Report:
Centre for Regional Partnership
Kobe University
Graduate School of Agricultural Science

Contents

はじめに	1
事業概要	1
I 地域共同研究	2
II 地域交流活動	5
III 相談・情報発信	9
組織体制	10

はじめに

■ 地域連携センターの役割とは

グローバル化がすすむ一方で、超高齢社会をむかえ、地域の社会経済の問題はますます大きくなっています。「地方消滅」の危機に対して、「地方創成」がとえられ、大学には、地域の「知の拠点」としての役割を果たすことが求められています。農学研究科地域連携センターは、地域と大学をつなぐハブとなり、課題解決や価値創造(イノベーション)を図ることを目的として設立されました。その使命は、1)農学研究科が有するあらゆる知をもって、地域の課題解決に貢献すること、2)大学生および地域の人々に、現場での経験に根ざした学習の場を提供すること、そしてその交流の上で、3)新しい知を創造し、世界と日本の地域の内発的な発展に寄与することです。

地域の多様なニーズや課題を、農学研究科・農学部の教員や学生につなげ、共同研究や実践として取り組むことをサポートし、その解決を図るという、中間支援組織としての機能を果たし続けていきたいと思っています。

■ ごあいさつ 地域連携センター長 高田 理

農学研究科地域連携センターは、大学が保有する知識や技術を農山村地域の問題解決に活用し、地域社会の発展に貢献することを目的として、平成15年に創設されました。主に次の3つの活動を実施しています。1つは、地域共同研究です。地域が直面している問題を解決し、地域がより発展するための調査研究を自治体などと共同で進めています。2つは、地域交流活動です。フォーラムや学習会などの開催を通じて相互理解するとともに、知識を共有し地域の発展につながる活動をしています。また、地域交流を通じた実践型の学生教育にも取り組んでいます。3つは、相談・情報発信活動です。共同研究や地域の問題の相談に応えるなど、研究や活動における事務局業務をするとともに、ホームページなどを通して最新の情報を発信しています。

平成19年に農学研究科と篠山市との間で地域連携協定が締結され、さらに平成22年には全学を対象とした大学協定が締結されました。平成18年に開設された篠山フィールドステーションを拠点に、様々な地域連携活動を展開しています。

前述の活動は主に篠山市と行われていますが、篠山市以外でも行っています。本『活動報告書』は、平成26年度に本センターが実施したこれらの活動を取りまとめたもので、本センターの活動の理解を深めていただく一助となるとともに、地域の発展に役立てば幸いです。

事業概要

I 地域共同研究事業

地域のニーズや農学部のシーズに基づき共同での調査研究をおこなう。

II 地域交流活動事業

地域と農学部で知を共有し、実践活動をおこなう。

- 1) 地域連携研究会(A-Launch)の開催
- 2) 農産物直売所を通じた、生産から販売までのプロセス体験機会の提供
- 3) 学生地域活動サポート事業
- 4) 農の学び場の実施支援
- 5) 福住地区まちづくり計画策定への参加
- 6) 農村ボランティアバンクKOB(ノラバ)の運営支援
- 7) プロジェクト
- 8) 講演など

III 相談・情報発信事業

地域と農学部を繋ぐ窓口として、情報の受発信をおこない各種相談に応じる。

- 1) ホームページ等による情報発信
- 2) オフィスアワーの実施
- 3) オープンキャンパスへの参加

I 地域共同研究

地域のニーズや農学部のシーズに基づき共同での調査研究を推進している。2004年より、地方公共団体や住民団体、NPO、協同組合等と協働で実施し、地域発展に寄与する研究を、地域共同研究として認定、支援している。

1 東条川疏水アートプロジェクト「鯉の里がえりツアー」を通じた地域資源活用 松本文子(農学研究科 生産環境工学) / 東播用水土地改良区



東条川疏水は、加東市、小野市、三木市に農業用水を届けている重要な地域資源である。2013年より淡山疏水・東播用水未来遺産運動においては、東条川疏水を地域全体で学び、資源として活かし、次世代に引き継ぐ目的でさまざまな取り組みを行っている。今年度はアートの力を借りて地域の課題を解決するアートプロジェクトによるアプローチとして、疏水の歴史や技術を大学生が学ぶ「学生交流アート&ワークショップ鯉の里がえりツアー」を開催した。このツアーでは、神戸大学生ら約60人が、加東市の特産であるこいのぼりをかたどったオブジェとともに、六ヶ井円筒分水や曾根サイフォンといった歴史的価値の高い疏水施設を巡った後、ワークショップで疏水活用のアイデアを発表した。

2 人工衛星画像解析を用いた兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発 長野宇規(農学研究科 生産環境工学) / 篠山市 / 丹波市 / 豊岡市 / 洲本市



日本の農地は現在温暖化に伴う災害の増加と農業の構造変化といった課題に直面している。いずれの場合も適切に状況を分析し、対策を講じるためには各地域の各圃場の栽培作物、営農暦の状況を把握することが重要である。しかし毎筆調査と呼ばれるこの作業を毎年行うには、多大な行政の労働負担が必要で、取り組みを取りやめる市町村が続出している。そこで本研究はLandsat8などの衛星情報と水土里情報システムなどの農地GIS情報の利用により、毎筆調査の自動化を目指すものである。技術開発が成功すると、行政負担の軽減、災害対応の迅速化、耕作放棄地対策の迅速化など、様々な面での情報支援に活用が可能である。

3 養鶏における酒粕の肥育飼料として可能性の研究 實安隆興(農学研究科 応用動物学) / (株)神戸酒心館



灘は日本一の酒どころであり多くの酒蔵が伝統の技を競い合い、味わい豊かな酒を、造り続けている。本研究では「宮水」や兵庫県米を原料として作られた地域の資源といえるこの灘の酒の酒粕に着目し、鶏の肥育飼料としての可能性を調べることを目的とする。研究をはじめにあたり灘の酒造メーカーに協力を依頼したところ、(株)神戸酒心館さんにご快諾いただき、酒粕の提供を受け実験を開始した。まず餌として利用できるよう酒粕を乾燥・粉碎し、通常の5%添加した飼料を与えて3週間肥育した。その結果、腹腔内脂肪組織の重量が減少するといった効果が確認された。来年度は、出荷齢に近い時期まで育て、同様の実験を行う予定である。

4 海里連携の地理学的考察
 長野野規 (農学研究科) / 淡路市 / 淡路東浦ため池・里海保全交流協議会 / 兵庫県農村環境部



兵庫県には4万3千のため池が存在する。これらは冬期に底泥を除去する作業(かいぼり)を通じて管理されてきたが、その習慣は廃れつつある。近年、海苔の色落ちを防ぐことを期待した漁業者がため池のかいぼりを要求し、作業にも参加支援するようになった。本研究では、海苔養殖の好立地や磯焼け発生地を広く見ていくことで海岸地形、河川と沿岸漁業の関係を地理的に整理する。一方で海苔養殖業者により海苔の栽培のための条件を聞き取りすることで、よりよい海里連携のあり方を考える。

5 失われつつある遺伝資源を利用する事で保全する:よみがえる梨遺伝資源'イワテヤマナシ'
 片山寛則 (農学研究科) / 篠山市真南条営農組合



現在日本で流通している栽培の梨のほとんどは「二十世紀ナシ」から改良されてきた。こうした品種の偏りによって遺伝的多様性が減少したり、品種改良が困難であったり、新しい病気への抵抗性の低下が懸念される。このような育種上の問題を解決するため、食資源教育研究センターでは現在550種類のヤマナシを保存しており遺伝バンクとしての機能を有している。それらのうちの45本を篠山市真南条上集落に移植した。結実量が少ないため加工はまだ先のこととなるが、6次産業化に向けた準備を進めている。

6 里山林を健康的に持続させる管理手法の実践的研究
 黒田慶子・庄司浩一 (神戸大学農学研究科) / 篠山市東木ノ部集落 / 青木ファーム



里山林の整備は、広葉樹大木の伐採・搬出に技術と費用がかかるだけでなく、作業の人材不足、獣害対策で林縁に設置された金網柵が整備作業を妨げていることから、作業が進まないのが現状である。そこで、地域の古くからの里山との関わりを拡大しつつ、都市住民を交えた整備の仕組みの構築が急務である。本研究では、篠山市東木ノ部集落、矢代集落の農家所有林で行った植生調査結果を元に、里山整備を再開するための方法を提案した。

7 アクターネットワークによる地域固有性の発現と農村発展モデルの確立
 中塚雅也 (代表) (農学研究科 食料環境経済学)



地域固有の文化、自然資源、知識の喪失が危惧されるなか、これら地域資源の保全と活用による農村発展モデルを導く。4年間の科学研究費研究期間のなかで、第一に、地域固有種の収集と特性分析、および、省資源型栽培方法を確立する。第二に、獣害として問題になっている野生動物を包摂する社会システムへの展開課題を解明する。第三に、それらの動植物を資源とする地域マーケティング戦略や、その推進における大学と地域の連携システムを確立する。(科学研究費・基盤研究(B)特設分野研究)

8 獣害対策の地域資源としての活用に関する研究
 布施末恵子 (農学研究科 地域連携センター) / 鈴木克哉 (兵庫県立大学) / 篠山市



野生鳥獣を誘因する農作物の食害や家屋損壊などの問題の解決には、集落の放棄果樹の積極的な活用が必要である。本研究では、複数集落で連携して早期柿収穫イベントを実施した篠山市畑地区に着目し、獣害対策(特にサル害)の地域資源としての活用の可能性を検討した。地域住民向けのアンケートの結果、イベントを実施した集落では、柿、サルを排除するだけでなく地域資源として活用したいという意向が高まった。今後も、地域が主体となった獣害対策の資源化を支援し、こうしたイベントを普及するための要件を明らかにしていきたい。

9 栽培方法と土壌環境が丹波黒大豆種子の品質に与える影響
 川西あゆみ (農学研究科 地域連携センター) / 篠山市



丹波黒は篠山市川北や日置地区が発祥とされているが、その集落内においても栽培方法が異なる。現在丹波黒の栽培地域は篠山市内だけではなく、兵庫県および京都府その他の丹波地域、岡山県、徳島県、滋賀県等まで栽培範囲は広がっている。篠山市内で生産された丹波黒は高価に流通しているが、品質の優位性は不明である。本研究では、栽培環境の異なり、栽培者など履歴や収量の明らかな丹波黒大豆種子を収集し、食品の栄養成分およびアントシアニンなどの健康成分を分析比較検討し、丹波黒大豆の品質の栽培方法や地形的差異を明らかにする事を試みる。

10 大学と連携した地域サポート人材の受入体制の構築と課題-地域おこし協力隊事業を事例にして
 高田晋史 (神戸大学農学研究科) / 篠山市地域おこし協力隊



本研究は、域学連携の発展形態として地域おこし協力隊事業に取り組む先行事例である富士吉田市と常陸太田市を事例に、地域サポート人材の受入体制の変化を分析し、その過程で明らかとなった課題や要点を考察した。分析の結果、事業の円滑な展開において、組織の範囲を超えて動いたり、強力なリーダーシップを発揮したりする中心人物や中間支援組織の存在が重要であり、受入体制は中心人物の動きに応じて変化していくことが明らかになった。

11 農産物交流による新しい都市ライフスタイルの提案
 溝口尚子 (農学研究科 地域連携センター) / 大阪府立大学 / 大阪Marche連合



地産池消や食育といった「食」を通じて農業問題に関心を持つ都市住民が増えてきている中、農家とのコミュニケーションが楽しめるマルシェが数多く開催されている。今回のヒアリング調査により、都市部のマルシェ運営者は農産物販売にとどまらず、飲食や「食と農」に関するワークショップなど、魅力的な場づくりに尽力していることが明らかとなった。今後は都市住民が希求するライフスタイルにあった「農」とのかかわり方を明らかにしていく。

II 地域交流活動

1) 地域連携トーク“A-Launch”の開催

2012年度より、昼休みの時間をつかった地域連携トークイベント「A-Launch」を開催している。これは、これまでセミナー形式にて開催してきた「地域連携研究会」を、より気軽に、また幅広い人たちに向け、地域での実践活動や農学の先端研究・理論に触れることのできる場として展開させたものである。今年度は表1のとおり2回実施した。これからも一層、食や農との現場で活躍されている方々との対話を、連携センターという空間を活用し、進めていきたいと考えている。



表1 A-Launch 実施の概要

	テーマ	話題提供者
第9回 7/16	地域問題の虫眼鏡 ～アートプロジェクトから生まれるルーラルデザインの形～	松本文子 (農学研究科 生産環境工学)
第10回 11/21	生体組織の巧みな構造から学ぶ細胞・組織のミクロの世界	上田 修司 (農学研究科 応用生命化学)

2) 農産物直売所“ささやま家”の運営支援

2013年度より農学部キャンパス内に農産物直売所「小さな直売所」を設置し、地域連携活動に関わる農産物・加工品の販売を開始した。地域連携センターでは、この直売所の売り場づくりや販売のプロモーションなどの支援をおこなっている。直売所設置の目的は、学生へ実践的な教育機会を提供すること、および農学部内での地域連携活動の理解や関心を得ることである。今年度は12月までに昼休みに7回開催し、学生活動団体と農業実習により育てた黒豆枝豆、米およびもち米、加工品としては餅の販売支援した。



3) 学生地域活動サポート事業

2013年度より学生の地域連携活動をサポートする「学生地域活動サポート事業」を開始した。この事業の目的は、農学部・農学研究科学生の地域の課題解決・価値創造につながる協働活動のサポートおよび、地域連携研究等の収集整理と情報公開(学内、地域、国際)の促進である。なお、農学部では、「実践農学入門」での地域体験学習を経て、右に示す、4つの学生団体が地域活動をおこなっている。



① ささやまファン倶楽部

2010年度から真南条上営農組合・真南条上集落と連携して活動している。地域住民や大学を卒業したメンバーと月に1～2回のペースで農作業のボランティアや里山・ビオトープの整備、イベントの企画・運営などに取り組んでいる。また、今年度は有志の女性グループと連携して集落の特産品をつかった「真南条御膳」を開発、11月に行われた学園祭「厳夜祭」で販売し、食を通じて地域の魅力をPRした。



② ユース六條

2011年度から福住地区まちづくり協議会と連携して活動している。農作業や集落の山整備ボランティアや、まちづくり活動に参加しイベントの企画・実施をしている。今年度は、地域のまちづくり計画の実行部隊として、地域の学びあいプロジェクト「〇〇先生の日」を住民や他大学の学生と連携して企画した。また、若者の活動拠点づくりとして福住の古民家改修に参加したり、西野々営農組合と連携し加西SAで黒枝豆の販売支援をおこなった。



③ はたもり

畑地区最大の伝統行事でありながら、少子高齢化によって存続が危ぶまれている「はた祭り」を中心に活動。メンバー以外の学生も一緒に巻き込み、曳き手・担ぎ手として2011年度から参加している。また、「はた祭りを盛り上げる会」と協力し、祭り市の企画やオリジナルグッズの制作などを行い、祭りの魅力を地域内外に発信している。その他、地域のさまざまなイベントへの参加や農作業の手伝いを通して、住民の方と交流している。



④ にしき恋

2012年度から西紀南地区まちづくり協議会を窓口として活動している。毎週末、祝日に西紀南地区の農家宅へ農作業を手伝いに行く活動を中心に、祭礼への参加、小学生との授業交流等を通じて、地域住民の皆さんとの繋がりを深めた。また地域の方からお借りした畑で、農産物の生産から販売までを行った。今後は学生を持つ新たな視点で、地域資源の新たな価値創造、アイデア提供を行い、地域に貢献していこうと考えている。

4) 農の学び場 Rural Learning Network

丹波をはじめ北近畿を中心とした農村地域の学習の場づくりとして、2012年度から農村地域学習ネットワークを構築し、運営を支援している。このネットワークは、1) 地域の問題や取組実態の理解、2) 先進的・革新的な取組や技術の共有、3) セクターと地域を越

えたネットワークづくり、4) 現場発の政策、事業、研究の形成、の場となることを目的としている。複数の組織からなる編集委員のもと、運営事務局が実務的な企画運営を担っている。2014年度は、計3回のセミナーを実施した(表2)

表2 セミナーの内容

	テーマ	話題提供者(所属)
第14回 7/21	地域に“生きたライブラリー”をつくるには	磯井純充(まちライブラリー提唱者・森記念財団)
第15回 2/16	ネオニコチノイド系農薬と生き物との関係から未来を考える	星信彦(神戸大学)
第16回 3/16	「地域おこし協力隊」から考える、これからの“よそ者”の役割とは?	岡司直也(法政大学)

△編集委員: 金野幸雄(一般社団法人ノオト代表)・小橋昭彦(NPO法人情報社会生活研究所代表)・高嶋正晴(立命館大学准教授)・西村いつき(兵庫県)・馬袋真紀(朝来市)

△運営事務局: 中塚雅也(神戸大学農学研究科)・内平隆之(兵庫県立大・エコヒューマン連携センター)・高嶋正晴(立命館大学)・竹見聖司(篠山市)・出町慎(関西大学・佐治スタジオ)・布施未恵子・高田晋史(ともに神戸大学篠山フィールドステーション)

5) 福住地区まちづくり計画策定への参画

篠山市福住地区では、平成25年に福住地区まちづくり計画(兵庫県・ふるさと自立計画)を策定し、今年度は計画にそった実践活動をおこなっている。地域連携センターでは、学生有志を募り、計画づくりのワークショップの企画・実施など、その策定支援をおこなってきた。実施にあたっては、ビオトープ整備とフットパス整備を組み合わせた「ビオ・フットパス」構想、高齢者の輸送サービスの整備、歴史資源の活用などのプロジェクトチームを結成。学生もその一員として活動推進の一翼を担っている。



6) 農村ボランティアバンクKOBÉ(ノラバ)の運営支援

農村ボランティアバンクKOBÉ(ノラバ)は、「農業や自然に触れる時間を持ちたい」「農業の現場を体験してみたい」という学生や社会人の方と農家をつなぐ仕組みである。2015年2月16日現在、会員登録しているノラバイターは463名、登録農家は71軒であり、そのうち2014年度の新規ノラバイター登録者は36名、新規登録農家は7軒であった。ボランティアの実施状況については、本年度は新規登録農家を含む10軒の農家からの募集依頼があり、マッチング件数は39件で昨年の35件から大きく増加した。



7) プロジェクト

①本の紹介プロジェクト

地域連携センターの移転に伴い、地域や他大学の取り組みに関する情報についてアクセスしやすい本棚づくりを行った。また、Facebookを通じて、地域連携センター所蔵の本について紹介を行ったほか、農学研究科の先生方がおすすめする本の紹介を行った。Facebook上で地域の方々からもコメントをいただき、本を介して双方向のコミュニケーションを広げることができた。



②キャリア懇談会

実践農学入門などを通して食や農に関心をもつようになった学生が、関連する分野での就職を考えられるようなきっかけづくりをおこなった。今回は、「キャリア懇談会～農にかかわる公務員～」と題して、農林水産省職員の方をお招きし、公務員就職に関心のある実践農学入門履修生や学生団体のメンバーと懇談した。



③海外インターンシップ

実践農学や地域連携活動を通じて海外の農業や畜産に興味を持った2名の学生に海外インターンシップ先を仲介した。1名は南ドイツのワイン醸造所において3週間の研修を行い、ブドウの収穫からワイン製造・販売までの過程に携わった。もう1名は畜産農家3軒の視察や関係者等との情報交換を行った。海外インターンシップ経験により、農業や畜産の専門スキルや実践的な語学力を身につけ、農学に関連する国際的なネットワークを築きかけができた。



8) 講演など

地域連携センターのスタッフが依頼された講演は次のものである。

日時	内容	依頼先	発表者名
2014/12/7	篠山の挑戦を支える大学の役割	(株)神戸新聞社・神戸大学	布施未恵子
2015/1/15	高齢者大学	篠山市	布施未恵子
1/22	域学連携の枠組みによる専門家配置 - 兵庫県篠山市の事例から -	岐阜大学応用生物学部附属野生動物管理学研究センター	布施未恵子
1/31	篠山市農業振興大会	篠山市	布施未恵子

1) ホームページ等による情報発信

地域連携センターHP(<http://kobe-face.jp/renkei/>)で、共同研究の内容や地域交流イベントの告知・レポートなどの情報を発信したほか、食農コープ教育プログラムHP(<http://www.kobe-face.jp>)では

インターンシップを体験した学生の声を発信した。また学生たちがより日常的に地域連携センターの情報にふれることができるFacebookとtwitter(@agregion)による情報発信もおこなっている。



2) オフィスアワーの実施

地域と農学研究科を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に答えるため毎週火曜日と金曜日にオフィスアワーを実施している。最も利用が多いのは地域支援に関する相談、次いで授業やインターンシップに関する質問、共同研究や地域研究に関する質問、その他は地域の農業に関する活動についての様々な相談であった。



3) オープンキャンパスへの参加

農学部主催のオープンキャンパスが開催された。地域連携センターでは本学部の教育プログラム「食農コープ教育」と学生の地域活動についてのパネルを設置し、高校生や保護者に対し、本プログラムや学生団体の取り組みを紹介した。また、学術推進研究員、学生スタッフ、学生団体所属の学生と高校生とが自由に話の出来るカフェコーナーを提供した。



組織体制

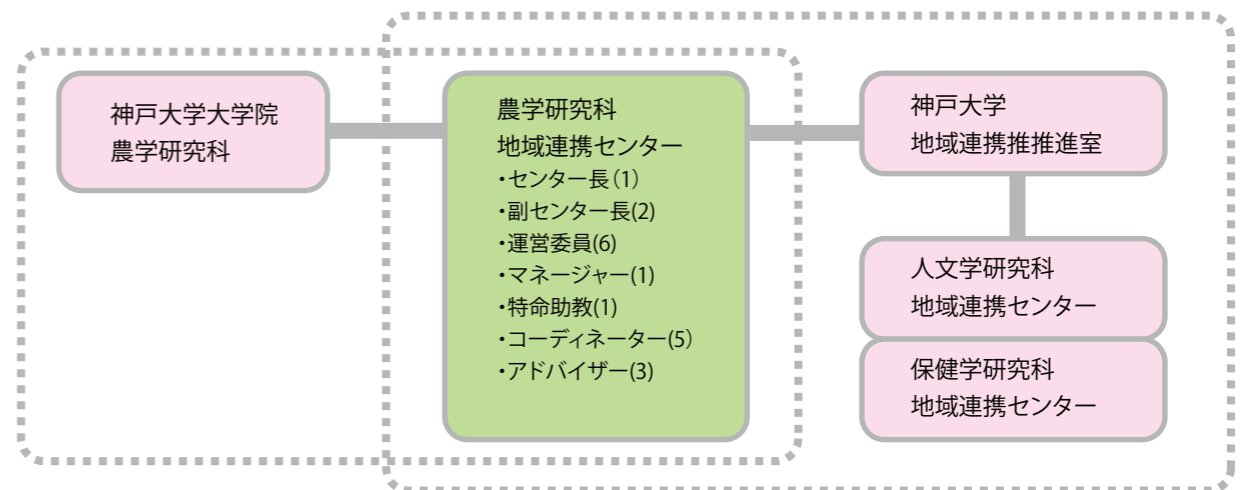
1) 名称

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

2) 組織

農学研究科(農学部)および神戸大学地域連携推進室の協力のもと、センター長と副センター長を中心に、運営委員会がボードの役割を果たし、教育研究ス

タッフ、事務スタッフ、学生ボランティア等が協働で事業を推進する。



3) 住所・連絡先

住所：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 A103号室
 電話/FAX：078-803-5939 (オフィスアワー：火曜日・金曜日10時～17時)
 Email：ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp

4) 平成26年度スタッフ

センター長	高田 理 (食料環境経済学 教授)
副センター長 マネージャー	杵本敏男(農環境生物学 教授) 中塚雅也(食料環境経済学 准教授)
運営委員	庄司浩一(生産環境工学 准教授)・中塚雅也(食料環境経済学 准教授)・ 實安隆興(応用動物学 助教)・石井弘明(応用植物学 准教授)・ 藍原祥子(応用生命化学 助教)・杵本敏男(農環境生物学 教授)
特命助教	布施未恵子(篠山フィールドステーション/地域連携センター)
コーディネーター	川西あゆみ(学術研究員)・溝口尚子(学術研究員)・ 谷津弘美(農学研究科M2)・中塚万智(農学研究科M1)・ 橋田 薫(発達科学部B4)
アドバイザー	加古敏之(神戸大学名誉教授)・伊藤一幸(応用植物学 教授) 内平隆之(兵庫県立大学環境人間学部 准教授)